

がん患者の生存率と余命 広報げろ 2018. 11

がん患者の生存率と余命

がんと診断してから一定期間後に生存している確率を、“生存率”といいパーセント(%)で表します。「あなたの胃がんの5年生存率は97%(健康な人を100%とする)」と言われることがあります。これは、5年以上前に診断された同じ進行程度の胃がんの人100人中97人が5年生きられたということを意味し、過去の治療症例の分析結果から導き出された値です。5年生存率97%というのは、胃がんでは病期Ⅰの早期のがんであり、治療によってほぼ治癒したという判断になります。病期が進むにしたがってこの値は下がり、病期Ⅳでは7%程度となっています。

生存率は過去の診断や治療についての効果を評価するうえで大変重要です。厚生労働省でも「がん診療連携拠点病院等」を指定し、治療水準の向上を支援するとともに、平成28年より「がん登録等の推進に関する法律」を適用し、病院ごとの、がんの治療成績を公開することを決定し、より正確な生存率の確定に努めています。治療技術については標準治療のガイドラインも示されており、治療医の努力によって技術の向上、均てん化も図られています。しかし受診環境、余病を持つ高齢者の多い地域、必要な情報の正確さなど克服困難な条件も多く、施設間で生存率の比較を十分な信頼性をもって行えるようになるのは今後の結果次第でしょう。

生存率は過去の症例の集積結果から判断されますが、がん患者やその家族が状況に応じて宣告される“余命”については、単純に、残された命の期間というわけではありません。余命は生存率を参考にしながらも今後受けるべき治療の効果などを参考に、あとこれくらいは生きられるであろうという医師の推測にすぎません。がんの進行度や性質によって抗がん剤をはじめ様々な治療の成績がガイドラインに反映されており、これらも予後を推測する材料となります。また余命を受け入れる態度によってもその期間は変わってきます。

余命の宣告は本人や家族のその後の生活に大きな影響を与えます。積極的に治療し、がんに立ち向かう人もあれば、悲観的な状況に陥る人もあるでしょう。死期が近づいていることは確かであっても余命は推測にすぎません。残された期間のある程度の目安を知ること、やり残したことに挑戦することも一つの道と考えます。

がんは地域での生活に大きな影響を及ぼします。金山病院では地域での生活を医療の面で支えるためにがんの治療に力を入れています。胃がん、大腸がん、肝臓がん、食道がん、すい臓がん、乳がんなどについて、手術治療、術前、術後の抗がん剤治療などを行っています。がんの治療では手術ばかりでなく術後の定期的な経過観察、がん患者の緩和医療なども大切で、岐阜大学腫瘍外科に所属し、専門病院での診療も経験してきた医師が、がん治療の技術を皆さんに提供しています。

がん治療は各方面での連携が必要なことも多く、金山病院では手術が困難な合併症を有する場合などは岐阜大学腫瘍外科や岐阜県総合医療センターなどと連携しながら治療を行い、地域の皆さんの便宜を図っています。これからも皆さんのご希望に沿いながら、努力してまいりますのでよろしくお願いいたします。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦

お詫びと訂正

9月号のフロムドクターのタイトルに誤りがありました。

(正) 災害と破傷風トキソイド (ワクチン)

お詫びして訂正します。